view
視野

葛藤する力の育ちは、心の育ちのバロメーター

加藤繁美
（大学教員）

「葛藤する幼児」という言葉を聞いて、まず頭に思い浮かんでくるのが四歳児の姿です。ダダコネする二歳児とも、「揺れる心」の三歳児とも異なる、「葛藤する幼児」の姿が、思案しながら自己決定する四歳児の中には、確かに育っているのです。

もちろん、四歳児の中に葛藤する姿が現れるのですから、五歳児が葛藤しないわけがありません。あるいは、揺れる三歳児の心の中に、葛藤する「心の芽」が育っていないということでもありません。葛藤する幼児の心は、乳幼児期の心の育ちに対応して、一定の順序性を持ちながら、子どもの中に育っていくのです。

実際、「カズラや藤がもつれからむ」（『広辞苑』）状態を表現した「葛藤」という言葉を見るとわかるように、「葛藤」する心が存在するためには、絡まった自分の心をメタ認知[注]する知的能力の発達が、どうしても必要になるのです。そしてそれと同時に、もつれた自分の心を解きほぐそうと努力する人間的能力の発達を抜きにして、「葛藤」する幼児の姿が出現することはないのです。

加藤繁美（かとうしげみ）
山梨大学教授。専門は保育構造論、保育実践論、保育制度論。主な著書に『対話的保育カリキュラム（上・下）』（ひとなる書房）、『記録を書く人 書けない人』（同）、『子どもと歩けばおもしろい』（同）がある。

つまり、ダダコネする二歳児は、自分の心の中で生じているイザコザをメタ認知するだけの知性がまだ十分に育っていないのです。そして「揺れる心」の三歳児には、複雑に絡み合う自分の心を、スッキリとつなげるだけの人間的能力に、まだ課題が残っているのです。ところが、そんな姿が、四歳半を過ぎる頃になると、確実に変化してくるのです。

例えば、子どもたちは一歳半を過ぎる頃になると、自分の中に生じた要求を他者に自己主張する形で、自分を表現し始めていきます。一般に「自我の誕生」といわれるこの時期（一歳半～三歳）を起点に、子どもの自我世界は拡大していきます。そして、この自己主張する自我の世界が、まさに二歳児のダダコネの原動力となっていくのです。

ところがこの時期、こうして表出される子どもの自己主張を、親や保育者が「受けとめて、切り返す」関係を辛抱強く繰り返すことで、子どもの中には、「社会的知性」とでも呼ぶべき知的世界が、緩やかに形成されていくことになるのです。アンリ・ワロンという心理学者はこの世界を「第二の自我」と呼びましたが、こうして形成された二つの自我世界を、自分の中で一つに統一しようとする力が、まさに「葛藤する力」となっていくのです。

つまり、「葛藤する力」の育ちは乳幼児の心の育ちのバロメーターとなっていくのですが、自分の中に形成された「自我」と「第二の自我」の間を揺れながら活動する三歳児には、二つの自我世界に「折り合い」をつけながら自己決定することは、まだ結構困難な作業なのです。ところがそんな子どもたちが、四歳半を過ぎる頃になってくると、二つの自我世界を統一する「自己内対話」の営みに、自ら挑み始めるようになっていくのです。

そんな四歳児の姿を、一人の保育者が次のような事例と共に語ってくれました。自分で片付けていた積み木をY君に片付けられてしまったK君が、持っていた積み木で突然Y君をたたいてしまったときのことです。思わず叱ってしまった保育者の横で、クラスの子どもたちが、二人の間に生じた事件の顛末を分析し、解決策を探り出していったというのです。

E「今、Kに聞いたら、K、全部片付けたかったんだって。でもさ、積み木でたたくのは良くないよ」
H「今日の〝キラキラさん〟になりたかったのかもよ」
S「でも、たたくのは良くない、バツ！」
R「たたいたら、痛いし」

こんな感じで、子どもたちの話し合いは始まっていったのですが、次第に子どもたちの関心は、それぞれの心の中で絡み合う、感情と知性の関係に向けられるようになっていくのです。

E「K、Yに『自分で片付ける』って言ったの？」
K「言った！」
Y「言ってない！」
A「Kがたたいたのは良くないし、でも片付けちゃったYも、ちょっと悪いかもな」
T「でも、たたくのは良くないよ。ぶって、またぶって、またぶつとそれがずっと続くし」
N「おれもそう思う。Y、痛かったよな」

面白いのは、自分たちのことをあれこれ語る仲間の声に耳を傾けていたKとYの反応です。「今、どんな気持ち?」と質問した保育者に向かって、突然K君にたたかれたY君は、次のように語ったというのです。

「片付けたかった。でも、ちょっと悪かったかも……」

おそらく、常識的に考えればY君の行動に非はないのです。でも、K君の心の中を想像できなかった自分を反省して、Y君は「ちょっと悪かったかも」と語ったのです。

しかしながら、それより面白いのが、Y君をたたいてしまったK君の言葉です。

「ぶって悪かった。みんな、話を聞いてくれてありがとう」

もちろん、ここに記されている四歳児の姿は、頭かきむしるような激しい葛藤というわけではありません。しかしながらここには、他者の心の中を想像し、自分の心の中を分析し、そこに自分なりの「折り合い」をつけながら生きていく四歳児の姿が、見事に描かれているのです。そして、こうやって悩みながら「折り合い」をつける力こそが、実は「葛藤する力」の本質部分を構成し、「心の芯」となっていくのです。

幼児後期に、思考し合い、協同し合う五歳児の生活を豊かに保障するためにも、「葛藤する力」が育つ四歳児の子どもの育ちに、丁寧に寄り添いたいものです。そして、そんな「葛藤する幼児の力」を育てる四歳児保育のあるべき姿を、研究的に交流したいものです。

注 自分の心の中で起きていることを外側から見つめ、認識する力を、一般にメタ認知能力と言う。自分の心を省察し他者の心を推察する、コミュニケーション機能の基盤を構成する力となる。